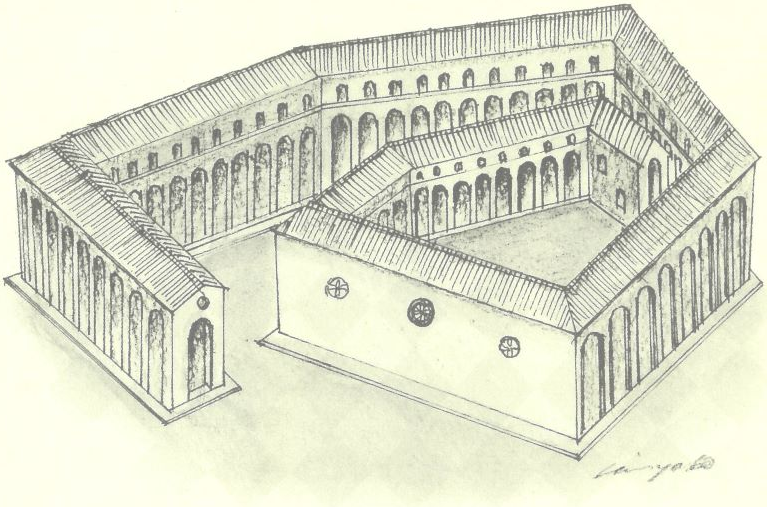


山口都絵画展

Miyako Yamaguchi

シリーズ〈創る〉——4

山口都絵画展

「記憶の都市を求めて」

Miyako Yamaguchi

会期＝2007年1月18日[木]→3月3日[土]

会場＝日本女子大学成瀬記念館

ごあいさつ

成瀬記念館では、展示活動の柱のひとつとして、造形芸術の分野で活躍する本学卒業生を紹介する企画展示シリーズ“創る”を行なっています。このたび、シリーズ“創る”(4)として、山口 都 絵画展「記憶の都市を求めて」を開催することとなりました。

山口氏は、日本女子大学附属豊明小学校から附属中学校・高等学校を経て家政学部住居学科に進みました。そこで「絵画デッサン」の授業を担当していた新制作協会会員 荻 太郎氏に出会います。また、在学中から女性だけの美術団体「朱葉会」に作品を出品していきます。

しかし山口氏が、より険しいプロの画家を志すようになったのは、卒業して数年が経ってからのことでした。二十代後半に三ヶ月余りにわたって訪ね歩いたヨーロッパの国々で新たなインスピレーションを得、帰国後、はじめて荻氏のアトリエの門を叩いたのです。以後、朱葉会展と新制作展への出品が活動の中心となります。

やがて、山口氏の作品に新たな世界が加わりました。いまはもう存在しない古代の都市の記憶が、山口氏の絵筆によって新たな命を与えられ、それ自体が生き物のようにカンヴァスの上で自由な姿をとり、輝きはじめたのです。いつしか私たちはその迷路に迷い込み、建物から、都市から、目を離すことができなくなりました。その後も山口氏はたゆまず研鑽を積み重ね、独自の境地を拓いて数々の賞を受賞、画家として充実した創作活動を続けています。また荻氏の跡を受け継ぎ、本学住居学科において「絵画デッサン」「基礎意匠」を講じ、現在も学生の指導にあたっておられます。

本展では、小学校時代の絵日記から昨秋の新制作展出品作まで、創作活動の重要な転機となった作品や未公開の作品を含む約40点を一堂に集めました。山口氏を衝き動かしてきた創作の動機とその軌跡の一端をかいまみていただければ幸いです。

2007年1月
日本女子大学成瀬記念館

母校での個展によせて

山口 都さんが初めての個展をされたとき、私は、「日本女子大学を卒業され絵の方に進まれた変り種の方です」というようなことを書きましたが、近年は、各方面で卒業生が活躍されていて、何の不思議もありません。大変失礼なことを書いたのを覚えている。17、18年昔のことです。

「それは山口さんの大学時代勉強した分野であって当然のモティーフであるかもしれません」とも書きましたが、それから現在までずっと変わらず描き続けている。その頑固さや、好奇心、冒険は作家にとって大変大切なことと私は思っている。その間、受賞の数も多く、御自分の道を切り開き、心象風景を描き続けている。

新制作展の《Il Paesaggio》(1986年、cat.no.10)、朱葉会展の《都市》(1987年、cat.no.11)を拝見したとき、その感性に驚き、よい作家になれると確信を持ちました。

勿論、風景写生ではありません。山口さんの心の中の風景です。人間がいつも一人も見当たりません。しかし、静かな足音が静かに聞こえてきます。

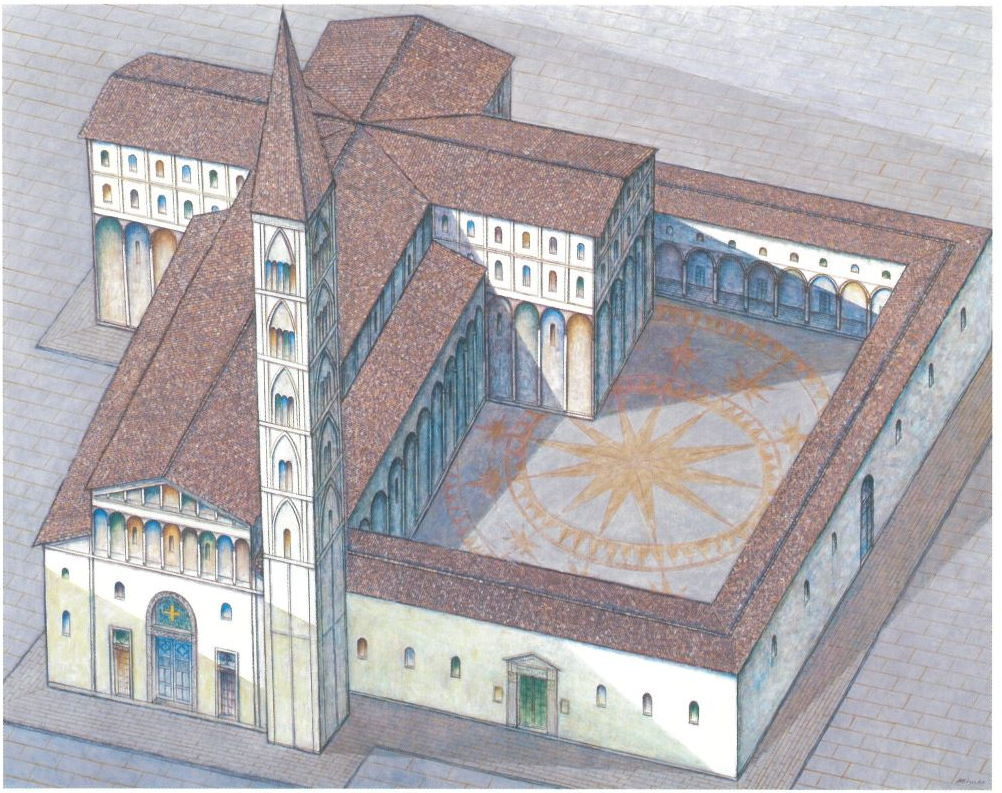
不思議な風景です。学生時代に勉強した遠近法を逆手にとって広さを表現したり、時には鳥となって俯瞰したり、楽しんで描いているように思われます。

1997年から一年間文化庁派遣芸術家としてフィレンツェに滞在して、都市の多くを巡り、新しい異国の風景に接し、又ひと回り大きく開眼したようです。それからの仕事は年々新しく、伊太利の建造物に触発され、山口さんの夢の街造りが展開したように私は思います。その静謐な画面の中の迷路を恐る恐る散歩してみたい気もします。

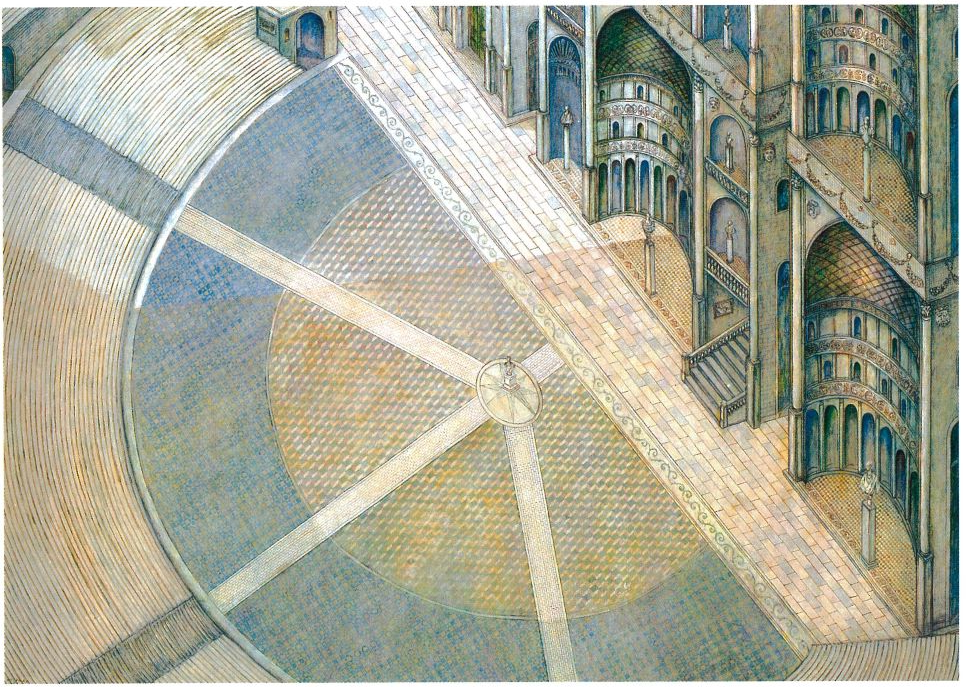
そしてこの度、母校の成瀬記念館で個展を開かれることになりました。大変嬉しいことです。きっと爽やかな立派な展覧会になるでしょう。

何卒、多くの皆様方にご高覧頂き、そして山口さんの新しい出発点になることを期待して止みません。そして又、新しい風景との楽しい会話が始まることを願い、個展の御成功を祈ります。

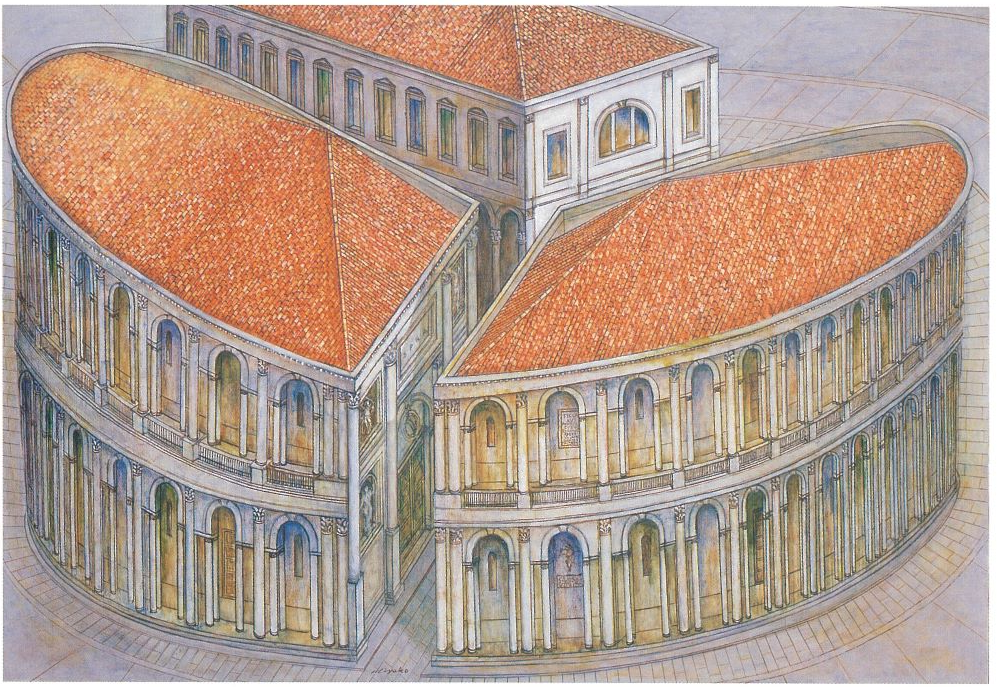
荻 太郎



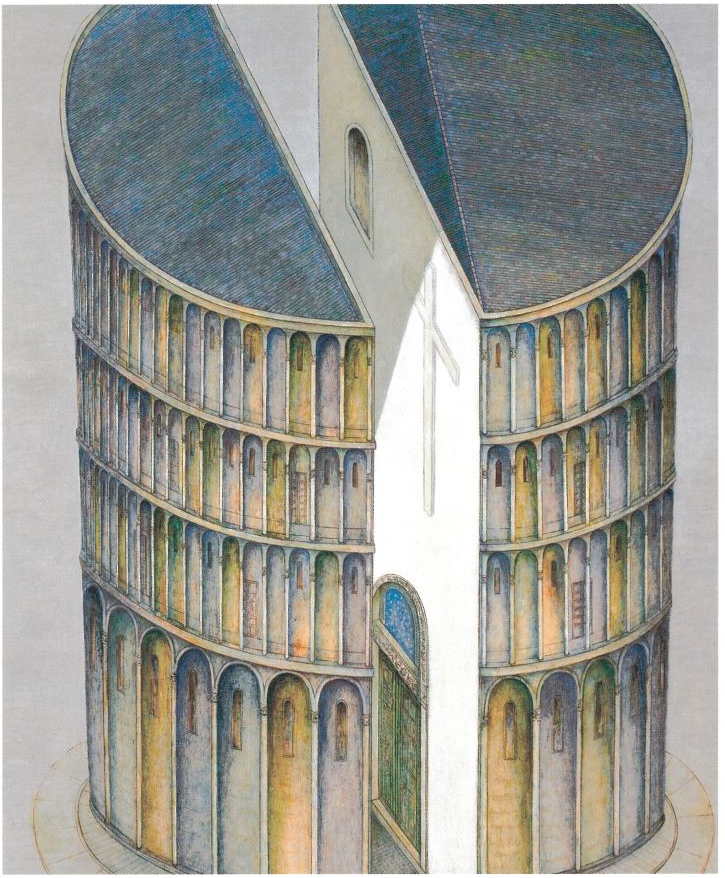
35 | 聖堂 | 2006年



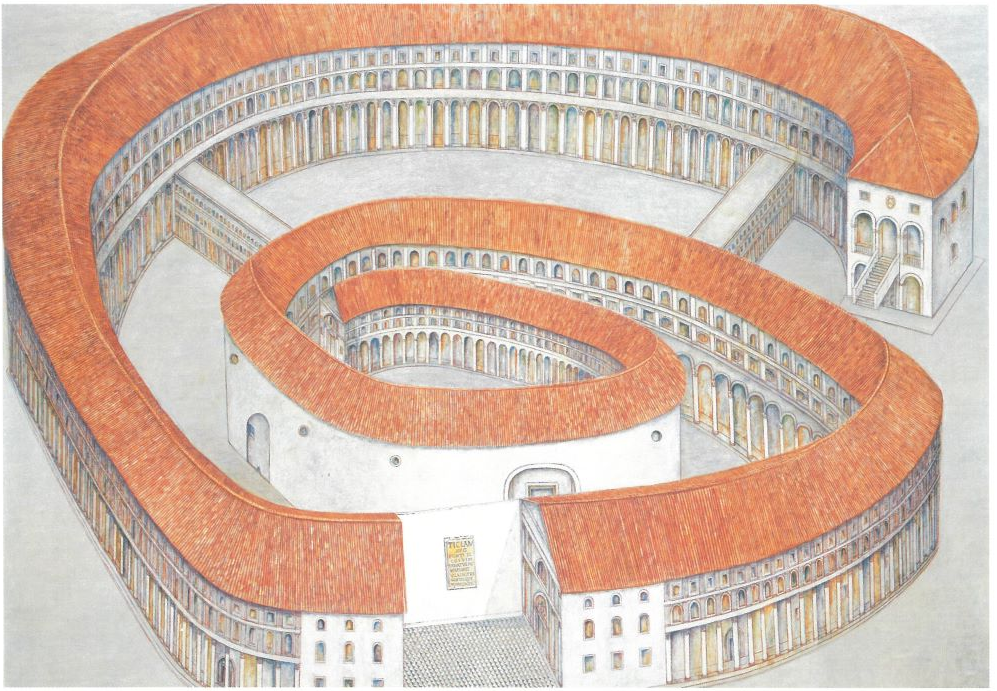
15 | オデオン | 1995年



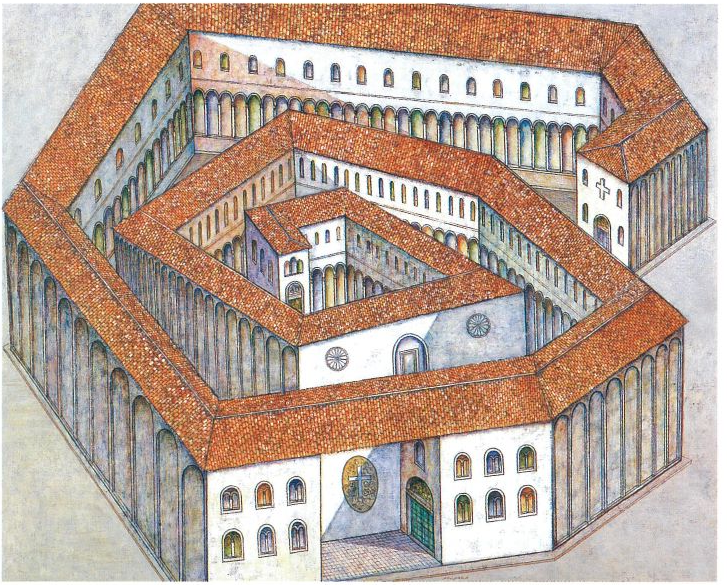
16 | パラッツォ | 1995年



14 | 洗礼堂 | 1995年

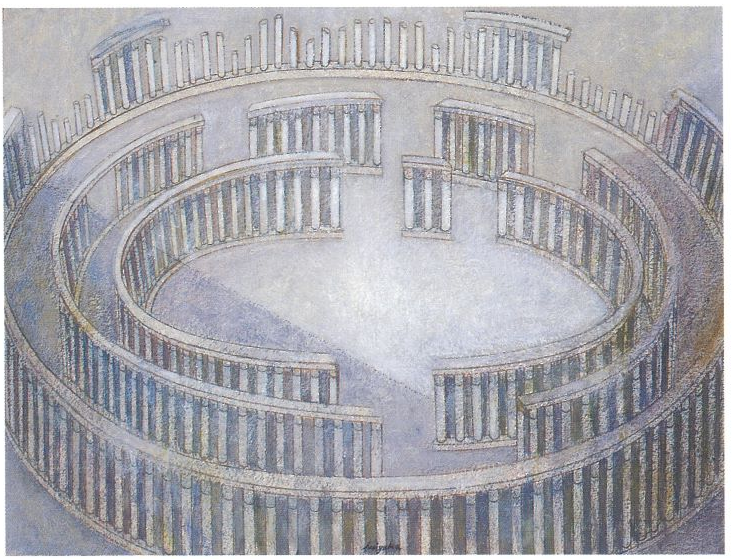


13 | ラビリンス | 1994年



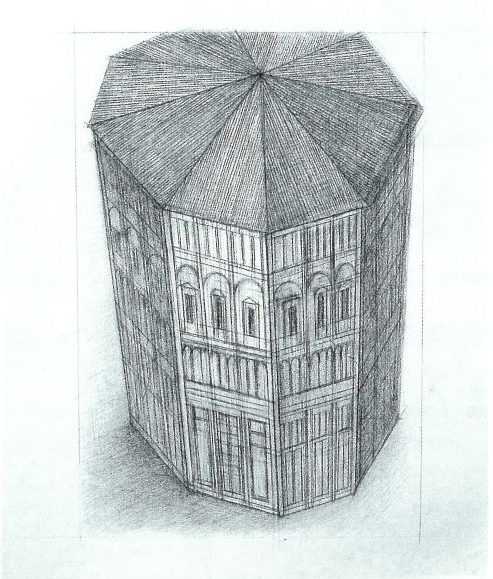
31 | ラビリンス | 2005年

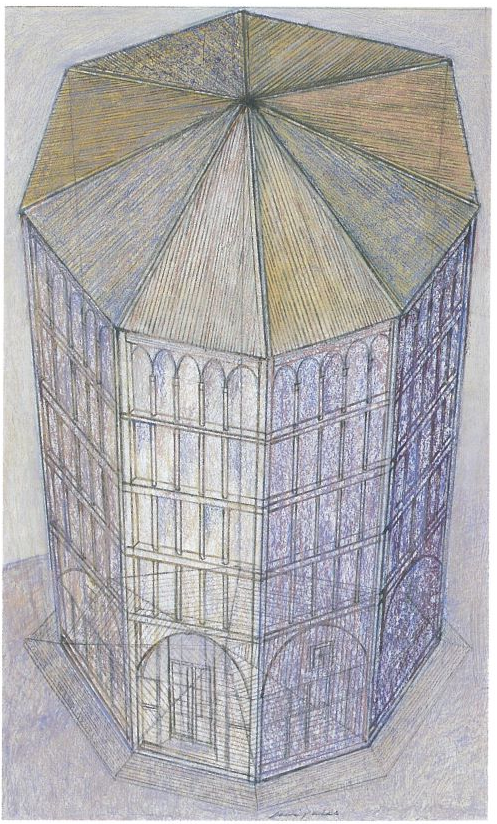
10 | Il Paesaggio | 1986年



25 | ピアッツァ | 2001年

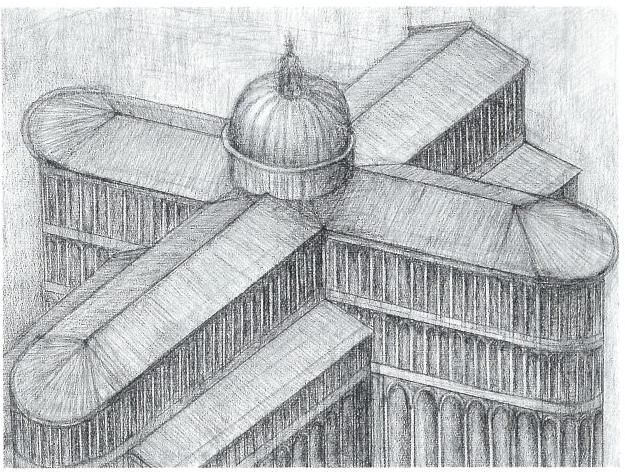
32 | クロノポリス | 2005年





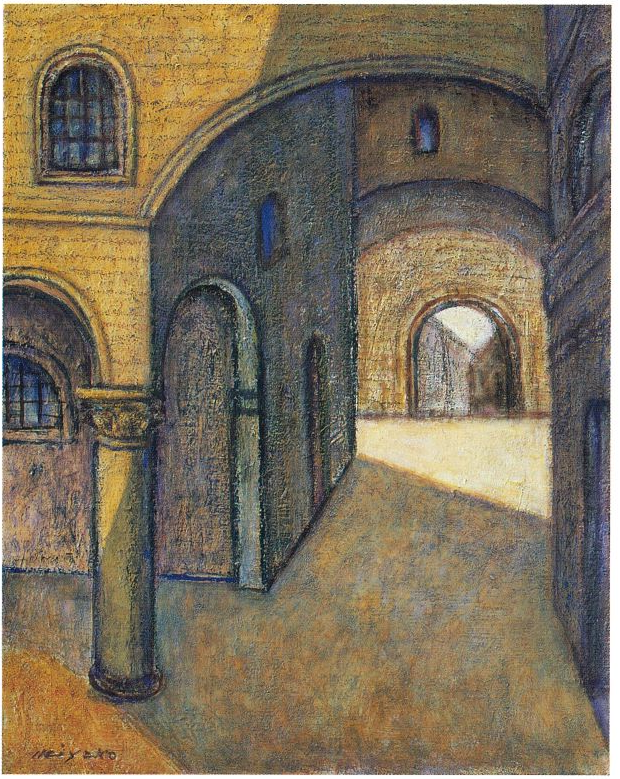
26 | 洗礼堂 | 2002年

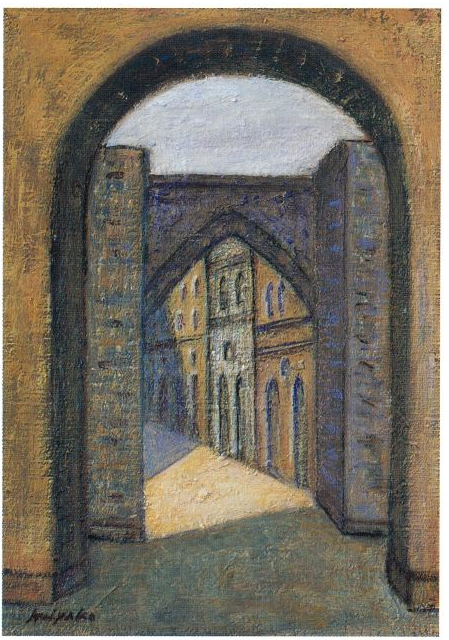
27 | 洗礼堂 | 2002年



30 | 聖堂 | 2004年

29 | 聖堂 | 2004年





33 | 中世の街 | 2005年

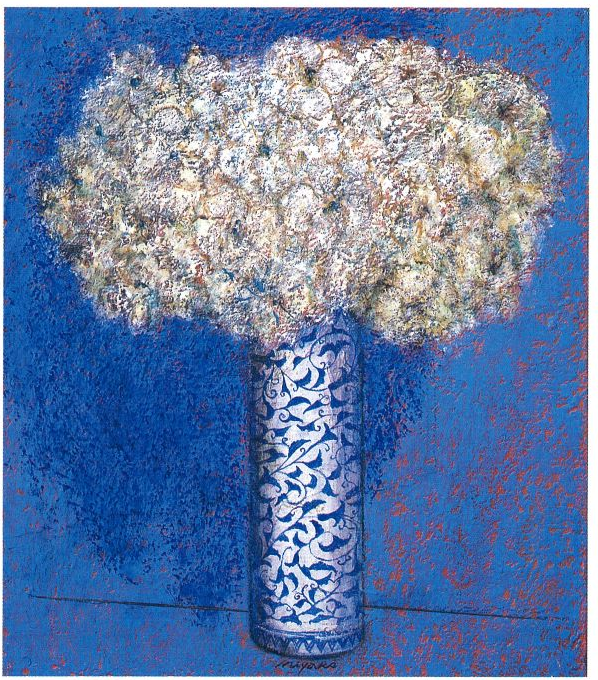
34 | 中世の街 | 2005年

7 | September | 1980年

9 | LA SERATA | 1985年

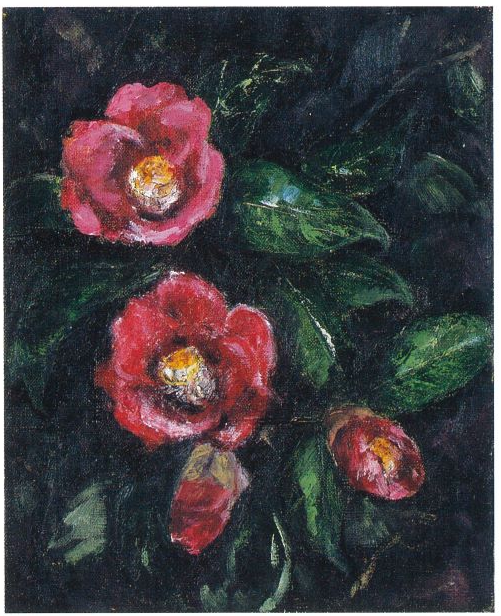
8 | Memories | 1981年

17 | ガーデニア | 1995年頃



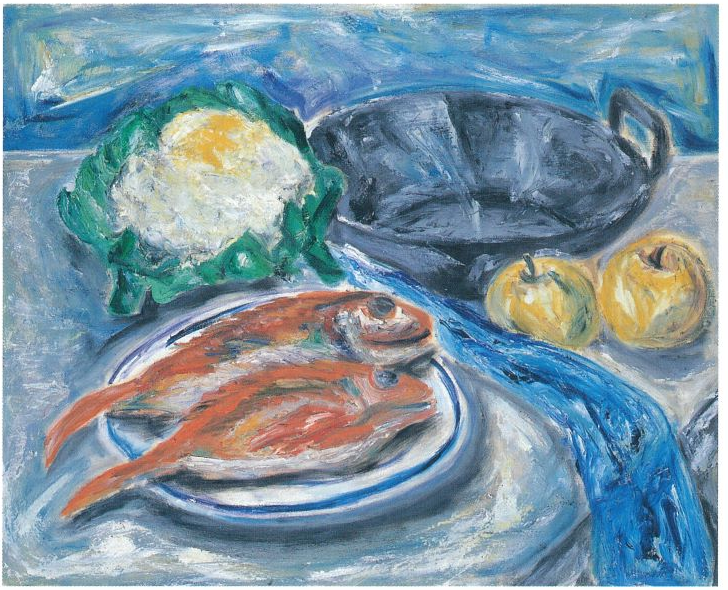
12 | Les Fleurs | 1989年

24 | ノクターン | 2000年頃



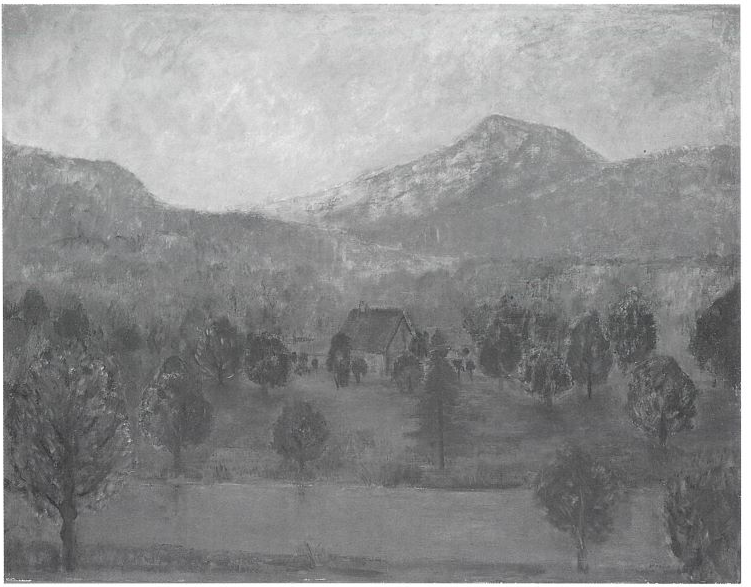
2｜人形｜1970年代初

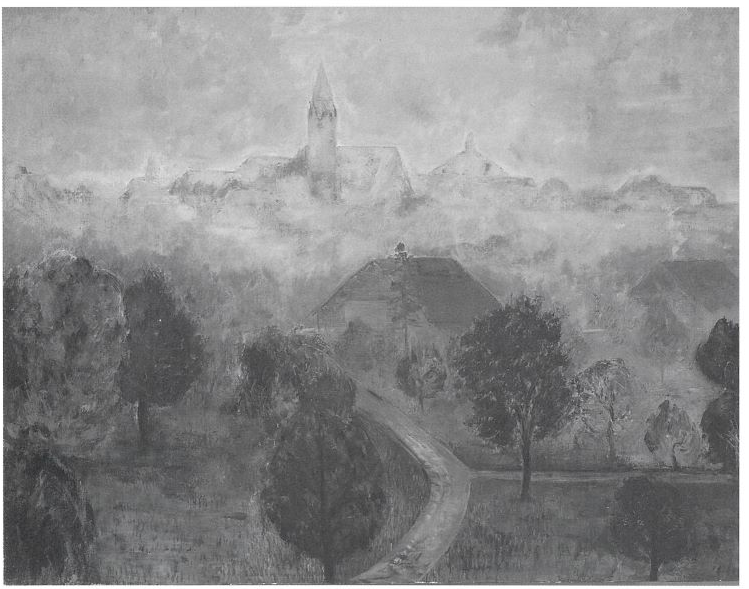
3｜椿｜1970年代初



1｜魚のある静物｜1960年代末

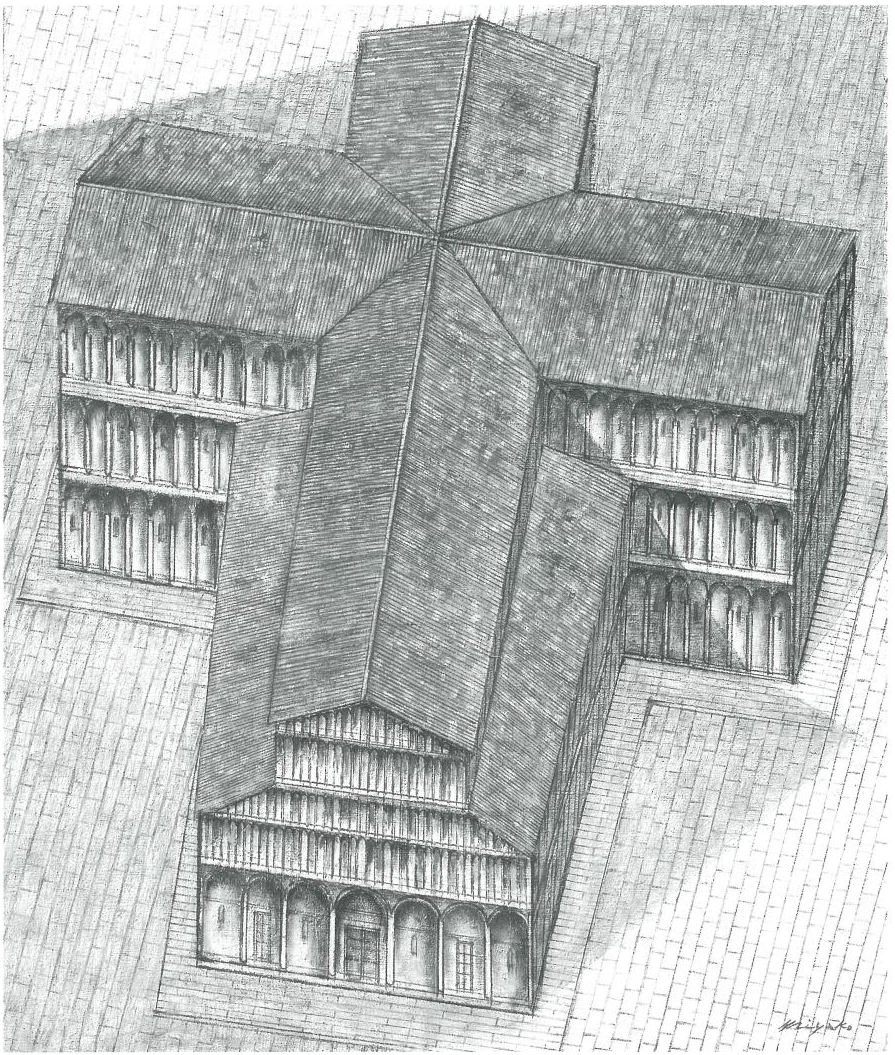
4｜出を待つ｜1973年頃



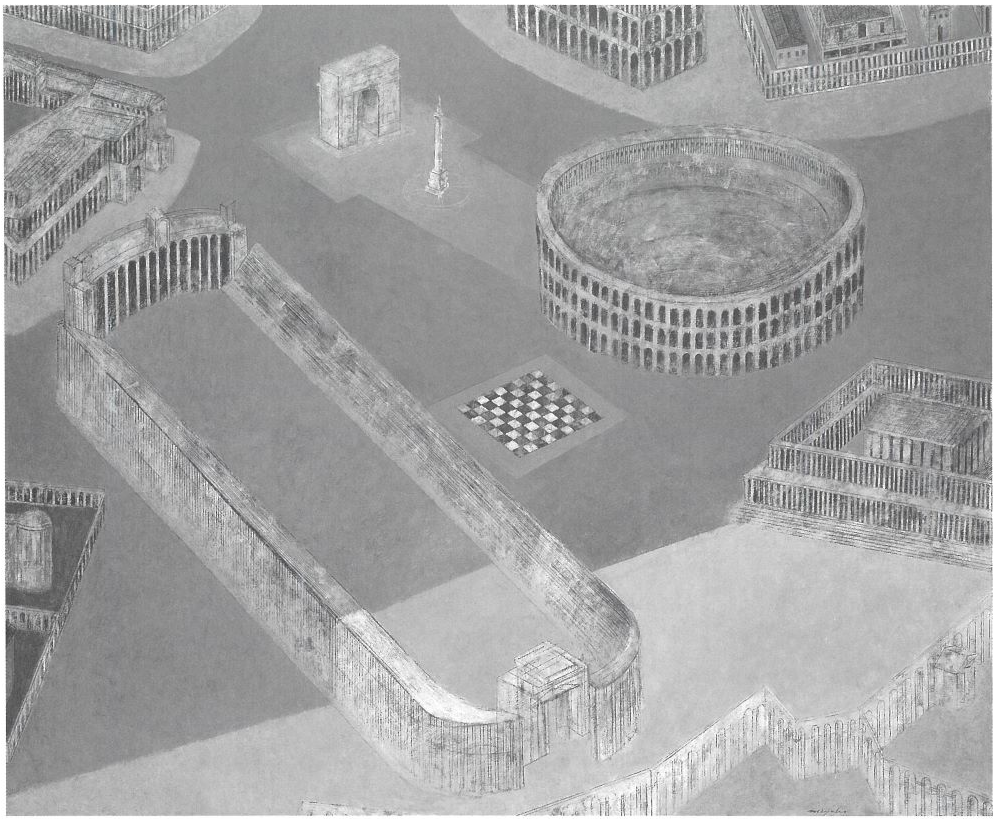


5 | 霧の風景(I) | 1979年頃

6 | 霧の風景(II) | 1979年頃



28 | 聖堂 | 2003年



11 | 都市 | 1987年

19 | ロマネスクの聖堂 I サン・ミケーレ・イン・フォロ(ルッカ) | 1998年

20 | ロマネスクの聖堂 II サン・パオロ・ア・リーパ・ダルノ(ピーザ) | 1998年

21 | ロマネスクの聖堂 III サンタ・マリア・デラ・ピアッツァ(アンコーナ) | 1998年

22 | ロマネスクの聖堂 IV サン・ピエトロ・ア・カッシア(キャンティ) | 1998年

18 | ドゥオモの見える風景 | 1997年

23 | ロマネスクの彫像(聖女) | 1998年

出品リスト

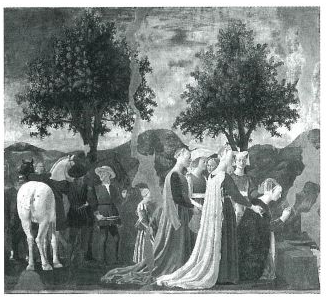
No.	作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)	出品歴／所蔵
1	魚のある静物	1960年代末	油彩、カンヴァス	53×62	
2	人形	1970年代初	油彩、カンヴァス	41×32	
3	椿	1970年代初	油彩、カンヴァス	27×22	
4	出を待つ	1973年頃	油彩、カンヴァス	73×91	第53回朱葉会展
5	霧の風景(I)	1979年頃	油彩、カンヴァス	91×117	第59回朱葉会展
6	霧の風景(II)	1979年頃	油彩、カンヴァス	91×117	
7	September	1980年	油彩、カンヴァス	162×130	第44回新制作展(初出品)
8	Memories	1981年	油彩、カンヴァス	162×112	第45回新制作展
9	LA SERATA	1985年	油彩、カンヴァス	162×194	第49回新制作展
10	Il Paesaggio	1986年	油彩、カンヴァス	194×162	第50回新制作展
11	都市	1987年	油彩、カンヴァス	162×194	第67回朱葉会展(日航賞受賞)
12	Les Fleurs	1989年	油彩、カンヴァス	変形	個人蔵
13	ラビリンス	1994年	油彩、カンヴァス	162×227	第58回新制作展(新作家賞受賞) 日本女子大学蔵
14	洗礼堂	1995年	油彩、カンヴァス	194×162	第75回朱葉会展
15	オデオン	1995年	油彩、カンヴァス	162×227	第59回新制作展(新作家賞受賞)
16	パラッツォ	1995年	油彩、カンヴァス	89×130	新制作協会絵画部受賞作家展
17	ガーデニア	1995年頃	油彩、カンヴァス	41×32	
18	ドゥオモの見える風景	1997年	エッチング・アクアティント、紙	50×35	
19	ロマネスクの聖堂 I サン・ミケーレ・イン・フォロ(ルッカ)	1998年	ドローイングペン・水彩、紙	25×18	
20	ロマネスクの聖堂 II サン・パオロ・ア・リーパ・ダルノ(ピーザ)	1998年	ドローイングペン・水彩、紙	25×18	
21	ロマネスクの聖堂 III サンタ・マリア・デラ・ピアッツァ(アンコーナ)	1998年	ドローイングペン・水彩、紙	23×18	
22	ロマネスクの聖堂 IV サン・ピエトロ・ア・カッシア(キャンティ)	1998年	ドローイングペン・水彩、紙	25×18	
23	ロマネスクの彫像(聖女)	1998年	鉛筆・水彩、紙	32×24	
24	ノクターン	2000年頃	油彩、カンヴァス	53×46	
25	ピアッツァ	2001年	油彩、カンヴァス	65×91	
26	洗礼堂	2002年	木炭・チャコール鉛筆、木炭紙	65×50	
27	洗礼堂	2002年	油彩・パステル、厚紙	45×30	
28	聖堂	2003年	油彩、カンヴァス	73×61	文京美術会展
29	聖堂	2004年	木炭・チャコール鉛筆、木炭紙	50×65	
30	聖堂	2004年	油彩、カンヴァス	182×227	第68回新制作展
31	ラビリンス	2005年	油彩、カンヴァス	130×162	第85回朱葉会展(損保ジャパン奨励賞受賞) 第25回損保ジャパン美術財団選抜奨励展
32	クロノポリス	2005年	油彩、カンヴァス	50×65	
33	中世の街	2005年	油彩、カンヴァス	41×32	個人蔵
34	中世の街	2005年	油彩、カンヴァス	23×16	個人蔵
35	聖堂	2006年	油彩、カンヴァス	182×227	第70回新制作展
表紙	ラビリンス	2004年	ドローイングペン・鉛筆、紙	12.5×18	

制作ノート

「絵の道へ」　山口 都

スーラとピエロ・デラ・フランチェスカ——子供の頃の記憶

小学生の頃、飽かずに眺めていた美術全集の中で、必ず開くのは後期印象派の画家、スーラのページだった。明るく静かな情景にとてもひかれていたのだが、それとは反対の意味でいつも必ず見てしまう絵があった。古色蒼然として奇妙な雰囲気、でも何故か気になって仕方がない、それが、ピエロ・デラ・フランチェスカの「シバの女王の聖木礼拝」だった。初期ルネッサンスの確か冒頭ページにあったように思うが、題名からしてキリスト教の知識のない子供には何のことかさっぱり解らないし、決して好きというわけではなかったのだけれど……。



ピエロ・デラ・フランチェスカ《シバの女王の聖木礼拝》(部分)

住居学科「絵画デッサン」

「絵画デッサン」での荻先生との出会いが、絵の道へ進む大きなきっかけとなった。「誰にでもひとつは良いところがあるのだから、それを見つけ自由に描かせる。そしてその良いところを伸ばす。」という先生の授業には、いつも楽しい自由な雰囲気が流れていた。荻先生の絵が好きだったこともあり、描くことも好きだった私にとって、貴重な時間になった。

カルチャー・ショック

建築を勉強していた3年生の夏休み、子供の頃からの夢だったヨーロッパに初めて旅した。最初の寄港地、ローマに降り立ってみれば、映像や写真で想像していたのとは大違い、モニュメンタルな古代の劇場やパンテオン、彫刻や噴水のある劇的な広場などが、圧倒的な存在感を持って迫ってきた。まるで頭を一発ガツンとやられたようなショックだった。そして帰国してみれば、パリもロンドンも全部どこかへ吹っ飛び、ローマ、フィレンツェ、そしてヴェネツィアといったイタリアの町々が頭から離れなくなっていた。

卒論——「広場」

ヨーロッパ、とりわけイタリアから受けた印象は消しがたく、新しい建物が次々と都市の形を変えていった70年代初頭の東京に暮らしていながら、まだまだ歴史的な都市から学ぶべきことがあるように思えた。当時、最先端を誇っていた霞ヶ関や浜松町の貿易センターといった無機質な超高層ビル。そうした超高層建築だからこそできた地上の空間に、イタリアの広場で見たような人々の集う人間らしい場が出来ないものだろうかというのが、卒論に対する最初の思いだった。

卒業後、絵の道へ

実際に目の当たりにしたヨーロッパの都市や建築から受けた刺激は、新しい建築空間の創造を目標に勉強をしていた私に、ひとつの疑問を投げかける結果となった。普遍的な美しさを持つ伝統的な都市や建築に対する思いは、同じ表現でも設計という手段をとらず別の道もあるのではないか。「別の道」の選択肢のひとつに浮かんだのが絵。学生時代に公募展(朱葉会展)に出品して以来、ずっと描き続けてはいたものの、美大の出身でもない自分が、絵の道に進むということはどう考えても大それたことのように思え、結局本当に決心するまでには10年近くの歳月がかかってしまった。

日常の室内から非日常の舞台装置へ

部屋の窓から光が差し込み、壁の鏡がもうひとつ別の空間を映し出す。戸棚やマントルピースの上の、時を経た牛骨やドライフラワー、そして壁にかけた古い地図。そんな身近で日常的な室内の静物を描いていたが、次第に同じ静物画でもより非日常的な空間を表現したいと思うようになっていった。そこで舞台装置のような空間を作ることにして、スチレン・ボードの箱にカーテンのように布を貼ってみた。幕で仕切られた部屋は、身近なモティーフを、舞台の一場面のような、非日常的な空間に変えた。それが「LA SERATA」(cat.no.9)や「幕間」といった作品である。

《幕間》(1986年)

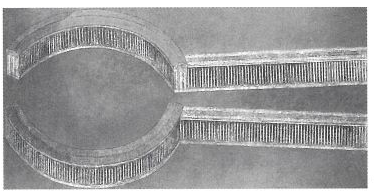
室内空間から都市へ

室内の静物や舞台といった空間を描きながらも、イタリアの都市に対する片思いはずっと癒えず、いつか自分なりのイタリア風景が描けたらと、ぼんやりと思い続けていた。誰かが既に描いたことのあるような風景画ではない、心象風景としての私だけのイタリアを描きたいと。そんなある時、ふと見ていた古代ローマの本のページに、ひとつの思いが頭をかすめた。それはもうなくなってしまった都市の、模型による復元だったが、こんな風に現存しない

町を自分で作ってしまったらどうだろう。学生時代やりたかった都市計画が、形を変えて実現するかもしれない、静物画のように一つ一つの建造物を組み合わせ、それを俯瞰した視点で捉えられたら……、それが形になったのが1986年の「Il Paesaggio」(cat.no.10)、1987年の「都市」(cat.no.11)だった。

都市シリーズ

新しい建築を設計するのとは逆に古い時代を空想しながら、自分だけの街を設計することは楽しかった。象徴である十字架の形をそのまま建築のプランとしているキリスト教の教会、鍵穴のようなフォルムをしたバロックの回廊――、時にはスチレン・ボードや油土で模型を作ったり、図面を描くように建物を造形できる。ひとつの視点からではない複数の視点からの描写、逆遠近法による空間、何でも自由に出来た。実際にイタリアの町に行けばまず最初に高い鐘楼に登って、町全体を見渡すことが習慣になった。



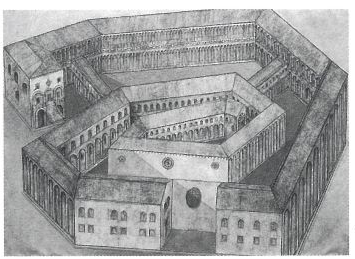
《回廊》(1988年)

女子大魂？

他人のやっていることはやりたくない。あくまでもオリジナルの自分のものを作りたい、そして自分で考えてやり始めたことは最後までやり遂げたいという気持ちは、もしかしたら子供の頃から繰り返し教えられた成瀬先生の「三つの教え」(小学校の頃は毎週、授業があった)の「信念徹底」「自発創生」のおかげかもしれないと、この頃ふと思うことがある。

ラビリンス

何となく紙に鉛筆でいたずらがきをしていたのが発端、うずまきみたいな形ができてふと思った。こんな奇妙な建物があったっていいじゃない？どこかで見たことがあるかもしれないけれどどこにもない、架空の都市の架空の建造物。ディテールは今まで見てきた私の好きなロマネスクのアーチやモザイクから自由に集めた。



《ラビリンス》第1作(1993年)

トスカーナ幻影

トスカーナ特有の赤い瓦屋根とロー・シェンナ*の壁、そこに降り注ぐ美しい光と影、静まり返って人っ子一人歩いていない昼下がりの町を目にした時、ごく普通の日常的な風景なのに、なぜかひどく現実離れした不思議な感覚に襲われた。東京とは違う強い日差しと深い影、ここならそんな不思議な情景を表現することが出来るのではないだろうか……。

＊黄土色、もともとイタリア語の "terra di Siena" (シエナの土の意)

イタリア留学

97年～98年の1年間、文化庁の在外研修員としてトスカーナ州の州都、フィレンツェに滞在した。穏やかな丘と糸杉に囲まれ、「神様がいつも微笑んでいる土地」と地元の人たちは自慢する。ルッカ、ピーザ、シエーナといった珠玉の町々、そして郊外には小さなロマネスクの教会やルネッサンスのヴィラ、古代のローマ劇場、エトルリアの遺跡などが点在する。モティーフは描ききれないほどだった。毎日毎日、イタリアの空気を胸深く吸い込み、体中がイタリアの色に染まっていった1年だった。

コルトーナにて

ピエロとの再会

アレッツオの教会でピエロ・デラ・フランチェスカのあの絵、「シバの女王の聖木礼拝」と対面した。まだ修復中で今のような鮮やかな色彩ではなかったけれど、それでもとても500年前の作品とは思えなかった。平面的でまるで時が止まってしまったようなその空間は、斬新で美しかった。その時、なぜか子供の頃にスーラの絵が好きだったことを思い出した。後年、ピエロの絵が大好きになり、更にモランディやバルテュスも好きになっていた。ピエロからスーラを経てバルテュス――一本の線が急に私の中でつながった。時代はそれぞれ違ってもそこに息づいている空間の不思議な共通性、知らず知らずのうちに、そんな空間に魅せられていたのかもしれない。

年譜

1950（昭和25）年
4月5日、東京都文京区に生まれる。

1957（昭和32）年
4月、日本女子大学附属豊明小学校に入学。図画を石原益夫、津田久実に教わる。

1963（昭和38）年
4月、日本女子大学附属中学校に入学。図画を宮島勝、石原益夫に教わる。

1966（昭和41）年
4月、日本女子大学附属高等学校に入学。美術を選択し、小林猶治郎、福井三知の指導を受ける。

1968（昭和43）年
この年より西村 赫に師事（大学2年頃まで）。

1969（昭和44）年
4月、日本女子大学家政学部住居学科に入学。在学中に荻 太郎の「絵画デッサン」の授業を受ける。

1971（昭和46）年
8月、欧州6ヵ国の美術・建築を見学し、サンモリッツの西洋美術史セミナー（Dr.B.Frey　ベルリン大学教授）に出席。
この年より真砂澄子に師事。

1972（昭和47）年
6月、第52回朱葉会展（東京都美術館）に《プレリュード》が初入選。以後、毎年出品。

1973（昭和48）年
3月、日本女子大学を卒業。
6月、朱葉会会友に推挙される。

1977（昭和52）年
3月、欧州7カ国を巡り、新たなインスピレーションを得る（ギリシャ・ユーゴスラビア・ブルガリア・イタリア・フランス・ベルギー・ルクセンブルク、6月まで）。以後、取材のためたびたび渡欧。
この年より、荻 太郎に師事。

1980（昭和55）年
6月、第60回朱葉会展（東京都美術館）に《エレクトリックシティ》を出品、川端賞を受賞。朱葉会会員に推挙される。
9月、第44回新制作展（東京都美術館）に《September》（cat.no.7）が初入選。
11月、ブルガリア建国1300年記念国際展（ナショナル・ギャラリー、ソフィア市）に《Before the revolution》を招待出品。ブルガリア美術連合主催。同ギャラリーに作品が収蔵される。

1981（昭和56）年
9月、第45回新制作展（東京都美術館）に《Memories》（cat.no.8）が入選。

1982（昭和57）年
9月、第46回新制作展（東京都美術館）に《Yesterday》が入選。

1983（昭和58）年
4月、日本女子大学非常勤講師。家政学部住居学科で「絵画デッサン」を担当（1999年度より「基礎意匠B」に名称変更）。
9月、第47回新制作展（東京都美術館）に《In the afternoon》が入選。

1984（昭和59）年
9月、第48回新制作展（東京都美術館）に《白い室内》が入選。

1985（昭和60）年
9月、第49回新制作展（東京都美術館）に《LA SERATA》（cat.no.9）が入選。

1986（昭和61）年
9月、第50回新制作展（東京都美術館）に《Il Paesaggio》（cat.no.10）が入選。

1987（昭和62）年
6月、第67回朱葉会展（東京都美術館）に《都市》（cat.no.11）を出品、日航賞を受賞。
9月、第51回新制作展（東京都美術館）に《都市（テアトゥルム）》が入選。

1988（昭和63）年
4月、初の個展（ギャラリー・オカベ、銀座）を開催。
9月、第52回新制作展（東京都美術館）に《都市（広場）》が入選。

1989（昭和64・平成元）年
2月、3月にかけて、日本女子大学学生ヨーロッパ研修旅行に講師として同行。1990、1992、1993年にも同行。
3月、第32回安井賞展（西武美術館、池袋 他巡回）に《都市》が入選。
9月、第53回新制作展（東京都美術館）に《都市（回廊）》が入選。
同月、「記憶の都市――山口都展」が西武百貨店（池袋）で開催される。

1990（平成2）年
9月、第54回新制作展（東京都美術館）に《ラ・チッタ》が入選。
同月、日本美術家連盟会員に推挙される。

小学校時代の絵日記

イタリアにて（1977年）

「基礎意匠B」キャンパスにて

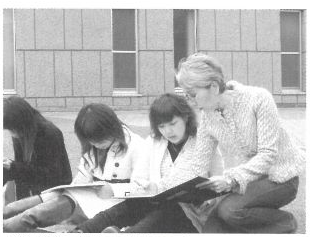
1991（平成3）年
9月、第55回新制作展（東京都美術館）に《クロノポリス》が入選。
同月、文京区秋の文化祭絵画展に《洗礼堂》を賛助出品、以後毎年出品。

1992（平成4）年
4月、日本女子大学成瀬記念館制作「成瀬記念館絵はがき」のうち、2点（夏・秋）の原画を描く。
9月、第56回新制作展（東京都美術館）に《聖堂》が入選。

1993（平成5）年
4月、関東学院女子短期大学家政学科非常勤講師、「ベーシック・デザイン」を担当（1997年まで）。
6月、第73回朱葉会展（東京都美術館）に《バジリカ》を出品、東京都知事賞を受賞。
8月、ホテル・アリマックス（渋谷）のロビーのタペストリーをデザイン。
9月、第57回新制作展（東京都美術館）に《ラビリンス》が入選、新作家賞を受賞、協友に推挙される。
10月、受賞者を中心とした朱葉会秋季展（銀座アートギャラリー）に《洗礼堂》を出品。

1994（平成6）年
1月、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館で開催された新制作ミモカ展に《ラビリンス》を出品。
2月、1994新制作協会絵画部受賞作家展（サエグサ画廊、銀座）に《洗礼堂》《テアトゥルム》を出品。
4月、日本女子大学成瀬記念館制作「西生田キャンパス絵はがき」のうち、4枚の原画を描く。
6月、第28回現代美術選抜展に《ラビリンス》が推薦される。文化庁主催、11月から5県を巡回。
7月、第1回「感動する・人と自然」大賞展に《都市》が入選、優秀賞を受賞。クラヤ薬品株式会社主催。
8月、第1回「感動する・人と自然」大賞展の入選作品展（九十九里研修センター）が開催される。
9月、第58回新制作展（東京都美術館）に《ラビリンス》(cat.no.13)《チルコ・マッシモ》が入選、新作家賞を受賞。
10月、第1回「感動する・人と自然」大賞の副賞でイタリア（ローマ、ヴェネツィア）、フランス（パリ）を訪問。

1995（平成7）年
1月、日本女子大学・住居学科「絵画デッサン」教室の現在まで——荻太郎と亀本信子・山口 都展（日本女子大学成瀬記念館）が開催される。
2月、新制作協会絵画部受賞作家展（サエグサ画廊、銀座）に《パラッツォ》(cat.no.16)《テアトロ》を出品。
9月、第59回新制作展（東京都美術館）に《オデオン》(cat.no.15)《パラッツォ》が入選、新作家賞を受賞。


「基礎意匠B」東京カテドラルにて

1996（平成8）年
2月、新制作協会絵画部受賞作家展（サエグサ画廊、銀座）に《チルコ・マッシモ》《洗礼堂》を出品。
6月、《ラビリンス》(cat.no.13)を日本女子大学に寄贈。
同月、第76回朱葉会展（東京都美術館）に《都市》を出品、文部大臣奨励賞を受賞。
9月、第60回新制作展（東京都美術館）に《コルティーレ》《ピアッツア》が入選、会員に推挙される。
10月、朱葉会秋季展に《ピアッツア》を出品（銀座アートギャラリー）。

1997（平成9）年
2月、第40回安井賞展（セゾン美術館、池袋 他巡回）に《ピアッツア》が入選。
9月、文化庁の新進芸術家留学制度による派遣で、フィレンツェに滞在（翌年9月まで）。

2001（平成13）年
4月、光画廊（銀座）にて個展。
6月、第81回朱葉会展に《水上都市》を出品、吉田ふじを賞を受賞。
同月、文京区所蔵絵画展（ギャラリーシビック、文京シビックセンター）に《洗礼堂》が出品される。文京区教育委員会主催。
10月、朱葉会秋季展に《洗礼堂》を出品（銀座アートギャラリー）。

2002（平成14）年
4月、日本女子大学西生田生涯学習センター講師（「絵に親しむ」を担当）。

2004（平成16）年
6月、文京区民大学講師（油絵を担当）。
同月、第84回朱葉会展に《聖堂》を出品、会員賞を受賞。

2005（平成17）年
6月、第85回朱葉会展に《ラビリンス》(cat.no.31)を出品、損保ジャパン奨励賞を受賞。
10月、光画廊（銀座）にて個展。

2006（平成18）年
3月、第25回損保ジャパン美術財団選抜奨励展（損保ジャパン東郷青児美術館）に《ラビリンス》(cat.no.31)を出品。
4月、文京美術会理事となる。
6月、文京美術会展に《都市》(cat.no.11)《聖堂》(cat.no.28)を出品。財団法人文京アカデミー主催。
10月、文京区秋の文化祭絵画展（ギャラリーシビック）審査員。財団法人文京アカデミー主催。

現在
新制作協会会員
朱葉会理事
日本美術家連盟会員
文京美術会理事
日本女子大学住居学科非常勤講師

（この年譜は、1995年に成瀬記念館にて開催した展覧会「日本女子大学・住居学科『絵画デッサン』教室の現在まで——荻 太郎と亀本信子・山口 都展」図録に掲載の年譜をもとに山口 都氏から提供された情報を加え成瀬記念館が編集した。）

目次

ごあいさつ ―― 3

「母校での個展によせて」荻 太郎 ―― 4

図版 ―― 5

出品リスト ―― 27

制作ノート「絵の道へ」山口 都 ―― 28

年譜 ―― 30

発行／日本女子大学成瀬記念館
〒112-8681　東京都文京区目白台2-8-1
Tel　03(5981)3376

制作／美術出版デザインセンター

日本女子大学成瀬記念館